

令和 2 年 7 月 13 日現在

機関番号：15201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K01127

研究課題名(和文) 日本における教師のレジリエンス形成に寄与するプログラムの開発

研究課題名(英文) Program Development for Building Teachers Resilience of Teachers in Japan

研究代表者

深見 俊崇 (Fukami, Toshitaka)

島根大学・学術研究院教育学系・准教授

研究者番号：80510502

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本における教師のレジリエンス形成に寄与するプログラムの開発を目的とするものである。プログラムの開発にあたって、まず若手・中堅・ベテラン教師に対するインタビュー調査から彼らのレジリエンスの特質を明らかにした。そして、オーストラリアの研究者が開発したレジリエンス形成プログラムである"BRiTE"の調査を実施し、そのポイントを抽出した。

それらを基に、教員志望学生・現職教員対象のレジリエンス形成プログラムを開発し、2018年度・2019年度に実施・評価した。受講者のリフレクションからは、プログラムを通じてレジリエンス形成に必要な視点を得られたことが概ね確認できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、諸研究とインタビュー調査を踏まえて、レジリエンスは学習可能なものであり、問題解決に向けて「自ら行動する」ことによってレジリエントな教師となり得ることを示した。それを踏まえ、3時間程度で実践可能な、教員志望学生・現職教員対象のレジリエンス形成プログラムを開発・実施し、プログラムを通じて一定の成果を得ることができた。そして、プログラムの学習内容を2020年秋に書籍として公刊することになっている。これらの点が学術的意義と社会的意義であると言える。

研究成果の概要(英文)： The purpose of this study was to develop programs that contribute to building teacher resilience in Japan. In developing the programs, we interviewed young, mid-career, and veteran teachers to identify the characteristics of their resilience. We also investigated and identified important components of BRiTE, which was developed by Australian researchers to build teacher resilience.

Based on these, resilience-building programs for prospective and in-service teachers were developed, implemented, and evaluated in FY2018 and FY2019. From the reflection of the participants, it was generally confirmed that the perspectives for building their resilience were obtained through the programs.

研究分野：教師教育，教育学

キーワード：レジリエンス BRiTE 教師教育 現職教育 教員養成 プログラム開発

1. 研究開始当初の背景

海外の教師教育研究において、教師のレジリエンスが近年着目されてきた。レジリエンスとは、「逆境、トラウマ、悲劇、脅威、ストレスの重大な原因（家族や人間関係の問題、深刻な健康問題、職場や経済的なストレス要因等）にうまく適応するプロセス」（**American Psychological Association 2013**）である。海外で教師のレジリエンスが着目される背景には、社会的な変化に伴う教師の仕事や役割の変化、離職率の増加、バーンアウトや心身疾患等の問題が顕在化してきたことが挙げられる（デー・グー 2015）。その渦中において、教員養成並びに現職教育を通して、教師のレジリエンスを形成する必要性が説かれるようになってきたのである。

先に述べた通り、レジリエンスは、「適応するプロセス」とであると定義されているが、これは問題解決に向けた「行動」として捉えられる。例えば、Ungar (2011)は、レジリエンスが「リソースをコントロールできる個人の資質」と「リソースを個人や集団で折り合いをつけられる資質」のいずれも含むものだと提起している。デーとグー(2015)によれば、教師のレジリエンスに関して、「日常的レジリエンス」が重要であり、それは教師のアイデンティティやコミットメントから引き出されるものである。そして、教師のレジリエンスを個人の資質と狭く捉えるのではなく、学校・職場等における関係性を踏まえて捉え直すことの重要性が指摘されている。これらの研究を基に、オーストラリアでは既に教師のレジリエンス形成に寄与するプログラムが取り組まれている（**Building Resilience in Teacher Education: BRiTE**）。BRiTEの基盤となっているのが、レジリエンスの形成（**B**）には、関係性（**R**）、ウェルビーイング（**i**）、イニシアチブをとること（**T**）、感情（**E**）の4つの視点を学ぶことが鍵を握ることである。BRiTEは、これらをオンライン上で学ぶコンテンツとして体系化したものである。

日本においても、諸研究で教師のバーンアウト傾向が確認されている。例えば、川瀬(2014)は、宮崎市で行った調査から、勤務年数が長くなるに伴いバーンアウト得点が高くなる傾向にあり、多忙や同僚との関係、校務分掌や保護者からの評価が教師のバーンアウトに関する重要な原因となることを明らかにしている。だが、日本においては、教師のレジリエンスに関する研究の蓄積がまだ多くないのに加え、教師のレジリエンス形成に寄与するプログラムに関しては未だ着手されていない。

2. 研究の目的

本研究では、日本における教師のレジリエンスに関する研究を拡張しながら、BRiTEをモデルとした教師のレジリエンス形成に寄与するプログラムを開発・試行・評価することを目的とする。具体的な研究課題として、(1)文献調査並びにインタビュー調査、(2)オーストラリアの訪問調査とBRiTEの分析、(3)レジリエンス形成プログラムの開発・実施・評価、(4)レジリエンス形成プログラムの学習内容の公刊、の4点を遂行する。

3. 研究の方法

2017年度から2019年度の3年間にわたる研究期間において、(1)～(4)に関する取り組みを進めた。

(1) 文献調査並びにインタビュー調査

教師のレジリエンスに関する研究を収集し、研究動向と課題を精査する。また、小学校・中学校・高等学校の若手教師8名、ベテラン・中堅教師12名の計20名を対象としたインタビュー調査を実施する。インタビューでは、教職生活の中で直面する様々な課題とそれをいかに克服できたか（またはできなかったか）について聞き取りを進めていく。なお、このインタビューで得られた事例は、後述のプログラムの教材とする可能性があることを調査協力者と共通理解しておく。

(2) オーストラリアの訪問調査とBRiTEの分析

BRiTEの開発者の1人であるDr. Mansfieldに対するインタビューを実施し、プログラム開発の背景やポイント等の情報収集を行う。また、現地で実践されているレジリエンス形成のワークショップを参観する。そして、5人の共同研究者がBRiTEの5つのモジュールを分担して精査し、教師のレジリエンス形成にあたって学習すべきポイントを抽出する。

(3) レジリエンス形成プログラムの開発・実施・評価

(1)と(2)を踏まえて、3時間程度で実施可能な教員志望学生・現職教員対象のプログラムを開発し、それらを実施・評価する。教員志望学生対象のプログラムについては、教職実践演習の2コマ分で実践することを念頭に、BRiTEの視点を押さえた上で、初任期に直面する問題をグループで協議することが主たる内容とする。現職教員対象のプログラムについては、BRiTEの視点を押さえることは共通であるが、異動後の環境変化の対応や教員間の協働に関する問題をグループで協議することを主な内容として設定する。教員志望学生・現職教員対象プログラムのいずれも受講時のワークシート、ふり返りのコメント等を評価材料とする。

(4) レジリエンス形成プログラムの学習内容の公刊

BRiTE は、オンライン上の学習プログラムとして展開されているが、日本においてはレジリエンスに関する研究知見が乏しく、それらの認識が十分でない。そこで、本研究では書籍化を通じて学習内容を公開していく。

4. 研究成果

4つの研究目的に対して、それぞれ以下のような成果を得ることができた。

(1) ベテラン・中堅教師と若手教師に対するインタビュー調査では、ワークラインを描いてもらいながら、教職生活の中で直面する様々な課題とは何であり、それをいかに克服できたか(またはできなかったか)を中心に聞き取りを進めた。若手教師は、赴任した学校による同僚・管理職からの支援の差、担当する学年の差による教科指導の負担感、2年目以降の校務分掌の負担感がネガティブな影響を与えていた。中堅・ベテラン教師に関しては、異動に伴う職場環境と校内における役割の変化がポジティブにもネガティブにも影響を与えること、教職経験の中で形成されてきた信念がレジリエンスの発揮に影響を与えていたことが確認できた。

(2) **Dr. Mansfield** によると、**BRiTE** が開発された経緯は、オーストラリアでは、赴任した学校によって十分なサポートが受けられない状況が深刻化していることであった。その問題を解決するために個人で学習可能な環境を保障するものが **BRiTE** なのである。**BRiTE** は、あくまで個人が取り組むためのリソースとして開発されたものであるが、**Murdoch** 大学等、**BRiTE** を活用した大学間ネットワークを通じて、教員養成・教員研修での活用が展開されつつある。

また、**BRiTE** モジュールの分析によって、それぞれの観点で何を学習することが必要となるか、どのようなワークを取り入れることで学習内容をより深めようとしているかを明らかにすることができた。

(3)(1)と(2)を基に2018年と2019年に教員志望学生・現職教員対象のプログラムを開発・実施・評価した。紙幅の都合上、現職教員対象プログラムのうち、中堅・ベテラン教師対象プログラムの概要を以下に示す(教員志望学生対象のプログラムについては取り組んだワークは異なるが同様の流れで進めた)。

	前半のプログラム		後半のプログラム
前半導入	プログラムの流れの確認	後半導入	後半の内容の確認
導入	レジリエンスとは何か(B の要素) ・定義とレジリエントな教師モデル ・レジリエンスの重要性	展開ワーク	事例「異動後に実践が継続できない困難」に置かれた時にどのようなアクションを起こすか
展開	関係性(R)の構築について振り返る ・関係性の構築と維持 ・専門的ネットワークとソーシャルメディア ・保護者・児童との関係構築	展開	イニシアチブをとること(T)を意識化する。 ・問題解決 ・継続的な専門的学習 ・効果的にコミュニケーションを図る
展開ワーク	事例「ある中学校教師が直面した異動後の厳しい状況」と同様の状況に置かれた時にどのようなサポートを誰から得るか。	展開振り返り	冒頭の事例の対応について+αのアクションについてグループでディスカッションする。
展開	ウェルビーイング(i)の重要性について自覚する。 ・個人のウェルビーイング ・ワーク・ライフ・バランス ・モチベーションの維持	展開	感情(E)の重要性について自覚する。 ・感情の自覚 ・感情のマネジメント ・楽観主義を育む
展開ワーク	「教師を目指した理由」をそれぞれ共有する。	展開ワーク	「感情のマネジメント」に関する手立てを踏まえて、自分が行ってきた対処や実際の経験をそれぞれ共有する。
まとめ	前半の概要を押さえて、コメントを記入してもらおう。	まとめ	後半の概要を押さえて、コメントを記入してもらおう。 また、プログラム全体についてもコメントしてもらおう。

教員志望学生対象のプログラムについては、**2018**年と**2019**年で計**6**回の実践を行った。**3**時間という限られた時間であったが、受講者のコメントからは、教職に就くために必要な視点や直面する問題への対処法を学ぶことが確認できた。

現職教員対象のプログラムについては、中堅・ベテラン教師対象と初任教师対象のものを開発した。中堅・ベテラン教師対象のプログラムについては、**2019**年**3**月の実践に加えて、**2019**年**8**月に発展プログラムも取り組んだ。初回のプログラムを通じて、中堅・ベテラン教師であっても、**BRiTE**の**5**つの視点を学ぶことで、自身に取り組めていない点や自覚していなかった点に気づくことができ、レジリエンスを発揮するための実践につながる可能性が認められた。また、発展プログラムにおいて、**2**回のプログラムに関する理解度と学習成果を受講者に自己評価してもらったところ、受講者は初回のプログラムで学習した内容を意識しながら実践に取り組むことができていた。さらに、発展プログラムを通じて、**BRiTE**の視点等をより深化させることができていた。**2019**年**8**月に実施した初任教师対象のプログラムにおいても、受講者は、初任教师としての経験を相対化し、課題解決に向けたアクションを考察できていた。

これらの成果より、教員志望学生・現職教員いずれも、**3**時間程度で実践可能なプログラムであっても、プログラムを通じてレジリエンス形成に必要な視点を得られたことが概ね確認できた。

(4)本プログラムの学習内容は、**2020**年秋に北大路書房より『教師のレジリエンスを高めるガイドブック(仮題)』として出版することが決定している。そのため、**2019**年の年末から**2020**年**3**月まで執筆作業にあたった。

主な参考文献

- ・ American Psychological Association(**2013**) *The Road to Resilience: What is Resilience?* American Psychological Association, Washington, D.C., USA. [online] URL: <http://www.apa.org/helpcenter/road-resilience.aspx>
- ・ クリストファー・デー, キン・グーノ小柳和喜雄・木原俊行(監訳)(**2015**)『教師と学校のレジリエンス—子どもの学びを支えるチーム力—』北大路書房
- ・ 川瀬隆千(**2014**)宮崎市における教師バーンアウトの実態．宮崎公立大学人文学部紀要, **21** : **35-51**
- ・ Ungar, M. (**2011**) *The Social Ecology of Resilience: Addressing Contextual and Cultural Ambiguity of a Nascent Construct. American Journal of Orthopsychiatry* **81**: 1-17

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 7件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 8件）

1. 著者名 深見 俊崇, 木原 俊行, 小柳 和喜雄, 島田 希	4. 巻 43
2. 論文標題 教師のレジリエンス形成を促す研修プログラムの開発と試行	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本教育工学会論文誌	6. 最初と最後の頁 177 ~ 180
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.15077/jjet.S43099	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 深見俊崇, 木原俊行, 小柳和喜雄, 島田希, 廣瀬真琴	4. 巻 19(2)
2. 論文標題 教師のレジリエンス形成を支援するフレームワークの検討	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本教育工学会研究報告集	6. 最初と最後の頁 203 ~ 208
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 安藤 寿康, 鹿毛 雅治, 市川 伸一, 松下 佳代, 木原 俊行, 志水 宏吉, 松浦 良充	4. 巻 58
2. 論文標題 実学 (サイヤンス) する教育心理学 隣接する学問との対話	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教育心理学年報	6. 最初と最後の頁 226 ~ 235
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.5926/arepj.58.226	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 廣瀬真琴, 宮橋小百合	4. 巻 71
2. 論文標題 学校間連携型授業研究ハンドブックの開発に関する基礎的研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 鹿児島大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 187 ~ 196
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小柳和喜雄	4. 巻 5
2. 論文標題 教職大学院の目的と役割を遂行していく際の悩みに関する研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 奈良教育大学 次世代教員養成センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 9-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小柳和喜雄	4. 巻 67
2. 論文標題 カリキュラム・マネジメント遂行における看過に関する研究	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 奈良教育大学紀要. 人文・社会科学	6. 最初と最後の頁 191-200
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小柳和喜雄	4. 巻 11
2. 論文標題 専門的な学習ネットワークが授業改善に向けた教員の指導性と主体性の構築に及ぼす影響に関する基礎研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 奈良教育大学教職大学院研究紀要 学校教育実践研究	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 廣瀬真琴、森久佳、宮橋小百合	4. 巻 70
2. 論文標題 Instructional Roundsの日本における試行と評価	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 鹿児島大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 249-261
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Toshitaka Fukami	4. 巻 40
2. 論文標題 A Study of Curriculum Designs for Freshman Pre-service Teachers to Cultivate Lesson Observation Skills	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Educational Technology Research	6. 最初と最後の頁 33-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.15077/etr.40088	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 深見俊崇	4. 巻 6
2. 論文標題 教師教育におけるリフレクションに関する「批判的」検討	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 大阪市立大学教育学会「教育学論集」	6. 最初と最後の頁 25-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小柳和喜雄	4. 巻 10
2. 論文標題 教師教育者のアイデンティティと専門意識の関係考察 -Self-study, Professional Capital, Resilient Teachers の視点から-	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 奈良教育大学「学校教育実践研究」	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 木原俊行	4. 巻 22
2. 論文標題 モチベーションと学校教育	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 最新精神医学	6. 最初と最後の頁 423-430
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 奥山茂樹・廣瀬真琴	4. 巻 22
2. 論文標題 教務及び研修に携わるミドルリーダーの役割にみる学校組織改革の要点：カリキュラム・マネジメントを視野に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 鹿児島大学教育学部研究紀要・教育科学編	6. 最初と最後の頁 239-251
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 0件／うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Toshitaka Fukami and Makoto Hirose
2. 発表標題 Building the Resilience of Japanese Preservice Teachers Based on BRiTE
3. 学会等名 ISATT2019 Conference（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 深見俊崇，木原俊行，小柳和喜雄，廣瀬真琴，島田希
2. 発表標題 中堅・ベテラン教師向けレジリエンス形成プログラムの評価
3. 学会等名 日本教育工学会2020年春季全国大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 深見俊崇
2. 発表標題 初任教师向けレジリエンス形成プログラムの開発と試行
3. 学会等名 日本教師学学会第21回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 深見 俊崇・木原俊行・小柳和喜雄・廣瀬真琴・島田希
2. 発表標題 教師のレジリエンス形成に寄与するプログラムの開発
3. 学会等名 日本教育工学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Toshitaka Fukami
2. 発表標題 Curriculum Design for Preparing Pre-service Teachers to Be Creative and Critical Practitioners.
3. 学会等名 SEAMEO RETRAC International Conference 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小柳和喜雄
2. 発表標題 小中一貫教育推進校において教員のリーダーシップを発揮させる上で壁になっていることに関する研究
3. 学会等名 日本教師教育学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 廣瀬真琴・森久佳・木原俊行・深見俊崇・宮橋小百合
2. 発表標題 Instructional Roundsにおける授業分析法の可能性と評価
3. 学会等名 日本教育方法学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Toshitaka Fukami
2. 発表標題 Development of practical images of prospective teachers in Japanese schools
3. 学会等名 ISATT2017 (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 木原俊行・島田希
2. 発表標題 教育委員会指導主事による校内研修のコンサルテーションの現状と課題
3. 学会等名 日本教師教育学会第27回研究大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 木原俊行・深見俊崇・坂本將暢・島田希・古田紫帆
2. 発表標題 教育工学的な視点に基づく教師教育プログラムの試行的実践
3. 学会等名 日本教育工学会第33回全国大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 吉崎静夫・村川雅弘・木原俊行・姫野完治・浅田匡・永田智子・田口真奈・田村知子・島田希・有本昌弘・田中博之・深見俊崇	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 228
3. 書名 授業研究のフロンティア	

1. 著者名 稲垣忠・市川尚・小林祐紀・佐藤靖泰・菅原弘一・寺嶋浩介・成瀬啓・深見俊崇・森下孟	4. 発行年 2019年
2. 出版社 北大路書房	5. 総ページ数 244
3. 書名 教育の方法と技術 主体的・対話的で深い学びをつくるインストラクショナルデザイン	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	小柳 和喜雄 (Oyanagi Wakio) (00225591)	奈良教育大学・教職開発講座・教授 (14601)	
研究分担者	木原 俊行 (Kihara Toshiyuki) (40231287)	大阪教育大学・連合教職実践研究科・教授 (14403)	
研究分担者	島田 希 (Shimada Nozomi) (40506713)	大阪市立大学・大学院文学研究科・准教授 (24402)	
研究分担者	廣瀬 真琴 (Hirose Makoto) (70530913)	鹿児島大学・法文教育学域教育学系・准教授 (17701)	